

# 中世伊勢神宮社殿についてのいくつかの問題

丸山茂

伊勢神宮の中世の社殿について、福山敏男博士はその著書『神宮建築に関する史的調査』と論文「外宮正殿庭作日記とその解題」のなかで神宮に伝わる建築部材を克明に記した史料を紹介され、それに基づいて社殿の復原案を示された<sup>(1)</sup>。そしてその多くが今日の社殿のような柱を立てない、板壁を井籠形に積み上げた板倉の形式であったことから、建築史の分野では柱を立てた伊勢神宮の正殿の前は板倉形式の正殿であったとする説が現われている<sup>(2)</sup>。一方、筆者はかつて神宮の諸社殿の大きさを記した最古の史料である『延暦儀式帳』の記載と、福山博士が紹介された中世の諸社殿の大きさとが大きく異なることから、板倉の形式をそのまま古代の形式を伝えるものと速断することに疑問を呈したことがある<sup>(3)</sup>。そのような推定には建物の構造や技法に古式がどのように残っているか検討することが不可欠であろうと考えるのである（外形や細部装飾は復古的に創作することも可能である）。小論では福山博士の示された復原案を考察するなかから構造・技法の特色の一端を抽出したい。本来であればその上で個々の社殿に

表1 延暦儀式帳と板倉形式時の規模比較  
 (『普請研究』二三号)

建物名称	延暦儀式帳の規模 (尺)	板倉形式時の規模(尺)	
		出	典
外宮宝殿	長16 広12 高10	22.2 14.6 16 *	外宮殿舎寸法頭工等引付 神宮文庫 5564 号 96~100 頁
内宮外幣殿	長15 広12 高8	15 12 13 *	同上 208~210 頁
外宮御饌殿	長10 広10 高10	19.5 * 12.5 * 14.5 *	現 状
荒祭宮	長31 広14.5 (21.5) 高13	22.8 13 15 *	内宮八箇請屋日記 375~378 頁
月読社	長17 広10 高6 (8) ----- 長8 広6 高6		
風日祈宮	式 外 長 広 高	12.45 9.6 12.5 *	外宮殿舎寸法頭工等引付 神宮文庫 5564 号 379~382 頁

\* は福山氏が示された諸図に物差で当たった略寸法  
 出典欄の頁数は『伊勢神宮の建築と歴史』の掲載頁

ついで、あるいは構造の全体的な変化発展の経緯について見通しを述べべきであるが、筆者はその任に耐えないので、小論では個々の特色ある事象について考えの及ぶ範囲で述べるにとどめる。なお、考察の便宜上筆者の作成した復原案を誌面をかりて提示するが、福山博士の示された復原図と大きくことなるところはない（福山博士の復原図は史料に不足する部材を推定で補っているが、小論では原則として補わなかった）。

福山博士が復原案を示された伊勢神宮の建物は次の通りである（門を除く）。

#### ○板倉の形式

- 内宮外幣殿 嘉録二年（一二二六）<sup>(4)</sup>
- 外宮東宝殿 康永三年（一三四四）<sup>(5)</sup>
- 内宮荒祭宮 応永三十三年（一四二六）<sup>(6)</sup>
- 内宮風日祈宮 文明十一年（一四七九）<sup>(7)</sup>

#### ○柱を立てる形式

- 内宮瀧原竝宮 室町時代初期<sup>(8)</sup>
- 外宮正殿 応永二十六年（一四一九）以前<sup>(9)</sup>

### 一、現在の内外宮正殿の構造と技法

伊勢神宮の諸社殿は神社建築の歴史を考えるうえできわめて重要な建物である。しかし、伊勢神宮正殿は現在でも神宮関係者以外は間近に見ることが出来ない。またその写真が一般に公表されたのも一九五

三年の遷宮に当たり撮影が許可されて写真集が刊行されてから後のこと<sup>(10)</sup>で、それ以前は研究者も文部省で撮影した数枚の写真を見ることができただけだったという<sup>(11)</sup>。次の一九七三年の遷宮の時も写真集が刊行され<sup>(12)</sup>、漸く神宮正殿の外観についてはその概略を知ることが出来るようになった。しかし、その内部及び建物の構造については部分的な写真と図面が公開されるにとどまり<sup>(13)</sup>、その実際を知ることが難しい。次の遷宮では構造図面の公表を切に期待するものであるが、小論の検討のための基礎作業として、現在公表されている図面と写真から試みの現状断面図を示す。現在入手出来る図面は次の三種である。

- イ 福山敏雄『神宮建築に関する史的調査』所収 平面図・立面図
- ロ 丹下健三他『伊勢—日本建築の原形—』所収 平面図・床伏図（図一）・立面図

ハ 小学館『神宮—第六十回神宮式年遷宮—』所収 平面図・立面図  
 この中ではロの図面が最も大きくまた詳細であるので下図として用いた（但し、ロ図は金具の使用が掲載する写真よりも豊富であるので、一九五三年の遷宮以前の形式を示す図面であると思像する。なお、平面図・床伏図については桁行と梁行の基準寸法を変えて現状より桁行の長いプロポーションとしている。小論では、歪みを修正して書きおこした）。

#### (一) 内宮正殿（図二）

以下、注目すべき特徴について列举する。

床 外周の桁行梁行に桁行を上木として床下貫を通す（組み方は背違

いらしい)。梁行に大引、その上に根太を渡して床板を受ける。

壁 床下貫で壁を受ける。

小屋組 梁組は桁を下木にして組む。内部の梁二本は中央がむくっており、虹梁の形状を示す。棟束は小屋貫で固定する。桁の断面は正方形、棟木は長方形で多少見付けが高い。両妻の扱首束は外半を扱首組に作り内半はそのまま伸ばして棟木を支える。

軒 破風は四五度の矩勾配。垂木は八十八枝で十二尺三寸の柱間に各十一本の芯打ち（一枝一・一二尺）、枝外垂木は各五枝（一枝〇・八八尺程度）。枝外垂木を狭く配っている。

縁 縁繫を柱にホゾ差しにし、柱のない位置では床下貫から金物で吊る。

## (二) 外宮正殿 (図三)

床 外周の桁行梁行に桁行を下木として（内宮の逆）床下貫を通す（貫の断面が内宮より大きい。貫の噛み合わせは縁繫のせい程度と想像する）。内部中央の柱筋交点に床束を立て（内宮にはなし）桁行の大引を渡した上に梁行に根太を掛けて床を受ける。

壁 床下貫で壁を受ける。板壁の最上部一枚を厚い力板としているか、頭貫を通していらしい。

小屋組 梁組は桁を上木にして組む（内宮の逆）。内部の梁二本は中央がむくっており、虹梁の形状を示す。棟束は小屋貫で固定する。桁の断面は正方形、棟木はかなり見付けが高い。

軒 破風の勾配はほぼ矩勾配。垂木は七十二枝で十一尺二寸の柱間に

各九本の芯打ち（一枝一・二四尺）、枝外垂木は各四枝（一枝一・二六尺前後）。枝外垂木も同じ間隔で配っているらしい。

縁 縁束の上端に縁葛を通し（内宮にはなし）縁繫は縁葛と床下貫の間に渡して、縁束の位置とは必ずしも一致しない。妻側の縁繫は柱間に受けを渡して受ける。縁板は極めて厚い。

## 二、中世社殿の構造と技法

(一) 板倉の形式

(イ) 内宮外幣殿 (図四)

柱間が桁行各五尺梁行各六尺の完数になっているらしい。破風の勾配は四八・五度前後で、矩勾配よりきつい。扉は外開きとすると垂木に当たって開かないので、内開きである。垂木は、柱間各五枝、枝外垂木二枝の手挟み打ちで、一枚寸法一尺の完数で配っているようである。小屋の振れ止めに「むかうさす」（向扱首）を用いている（同材は、以下すべての社殿で用いられている）。桁・梁の断面は、横に扁平な断面である（以下、各社殿も同じ）。

(ロ) 外宮東宝殿 (図五)

この社殿は棟の高さを決める部材について、二つの系統が混入していると考えられる。その一は扱首束（「うだつ」）の長さで、福山博士はこの長さを採られて五十一・五度前後に破風の勾配を定めておられる。また一つは、「いのこ」および「むかうさす」の長さから決定される棟の高さで（「うだつ」の高さで棟を決めると「いのこ」の長さ

がかなり余ってしまった)、こちらを採用すれば破風の勾配は五十六度前後と、さらに急になる。「うだつ」の寸法は詳細に記されているので、後者はなんらかの事情で旧部材の寸法が混入したとも考えられる。桁は板壁芯より外側に持ち出している。扉は外開きとすると垂木に当たって開かないので、内開きである。垂木は、柱間各六枝、枝外垂木三枝の手挟み打ちで、七尺四寸の柱間を六枝に割る(一枝一・二三尺)。枝外垂木を狭く配る(一枝〇・九四尺)。棟持柱を妻面から比較的離して立てている。

#### (ハ) 内宮荒祭宮(図六)

破風の勾配が五十八度前後で、正三角形に近い小屋となっている。他の社殿の扱首束(「うだつ」)は棟木の上端までの寸法をとるが、この社殿では棟木を突き抜けて「おゝいの板」に届く寸法を記載している。扱首の構造が他の社殿と異なっているのである。扉は「さらいた」の上、「ゆきはしら」(方立)の外側に二寸の厚みの扉を納めることが出来ないので、内開きであろう。垂木は七尺六寸の柱間に七枝の手挟み打ち(一枝一・〇九尺)、枝外垂木は三枝で柱間より疎らに配っている(一枝一・三七尺)。

#### (ニ) 内宮風日祈宮(図七)

破風の勾配は四十八・五度前後。桁は板壁芯より外側に持ち出している。棟木を桁よりも五分高くして垂木の当たり分としているところは、他の社殿との墨付けの違いを示しているよう。扉は外開きとすると垂木に当たって開かないので、内開きである。垂木は四尺一寸五分の

柱間に四枝の手挟み打ち(一枝一・〇四尺)、枝外垂木は三枝で柱間より狭く配っている(一枝〇・九一尺)。棟持柱を妻面から比較的離して立てている。

#### (ホ) 考察

床を支える構造は四社殿とも同様で、束柱の上に「地の板」をまず梁行に渡し、次いで桁行の壁通りに渡す。棟持柱の棟木への取り付き位置がはっきりするものについては、妻面から離して破風ぎりぎりまで支持している。桁と梁の組み方はすべて桁が下木で、二分の一度程度の断面を噛み合わせる。桁を外側に持ち出している社殿があるのは、校倉の構造が桁を大きく外へ出していることとの関連があるのであろうか。扱の足元のおさまりは作図によれば桁をよけるものと桁に掛けるものがあるようである。破風の勾配は矩勾配のものは一つもなく、なかには六十度にかいものもある。桁・棟への垂木と破風の掛け方は微妙で、中には面戸板で受けて肩を落とさないものもあるように想像する。扱首束の形式には少なくとも二通りある。梁が垂木上端より突き出るものが多く、また野地板がまったく記載されていないことから、あるいは垂木の上に直接屋根を葺いた可能性もある。垂木の配り方は色々で、枝外垂木を柱間と等しく配るもの、広くするもの、狭くするものがある。扉はすべて内開きである。

#### (二) 柱を立てる形式

##### (イ) 内宮瀧原竝宮(図八)

この社殿の史料は誤記があるようで、部材の数量をそのまま用いて

復原することができない。福山博士は幅一尺長さ一丈九尺の「御ゑんのいた」が九枚ではあまりにも縁が突き出してしまうので、縁板を四枚で復原図を描かれている。また「御つかはしら」も縁の束柱を含めて十四本立て、史料の十六本すべてを用いていない。筆者の図は部材をすべて用いるように心掛けたが、「あしかため」は切り使いをしている。また、縁の束柱は書き漏れがあると考えた。

破風の勾配は五十・五度前後。扉は外開きとすると垂木に当たって開かないので、内開きである。垂木は六尺三寸の柱間に六枝の手挟み打ち（一枝一・〇五尺）、枝外垂木は三枝で柱間より狭く配っている（一枝〇・九四尺）。

#### (ロ) 外宮正殿(図九)

この社殿については以前に考察したことがあるので、要点を記せば次のとおりである。

床は束柱を立てた上に「しきけた」を梁行桁行に渡して受ける。壁板の下端を何で受けるかは微妙であるが、長押で受けるか「よせしきみ」を互いに組んで受けるかであろう。梁組は桁に対して梁が下木となっている。梁の断面は扁平な使い方である。豕叔首は各梁の上に四組立てている（小論の社殿はすべて同じ）。扉の開きは内開きとも外開きとも決め手がない。破風の勾配は五十度前後である。垂木は一〇尺三寸の各柱間に九枝の手挟み打ち（一枝一・一四尺）、枝外垂木は四枝で（一枝一・一一尺）、すべて均等に割り付けているようである。縁は、縁束上部を「大床のけた」で繋ぎ、縁束と柱の間を「はりけ

た」（縁繋ぎ）で結んで、その上に「大床の桁」と同厚の厚い「すのこ」を敷いている。

### 三、外宮正殿における構造の変化

福山博士によれば、明応四年（一四九五）より慶長十七年（一六一二）までの百十七年間、各別宮では正遷宮造替の社殿が総て失われ、外宮正殿の場合も十五世紀に入って荒廃が進み、永享六年（一四三三）に建てられた正殿が文明三年（一四七一）に倒壊した後は、永禄六年（一五六三）に再興されるまで九十二年間、本格的に建てられた正殿は存在しなかった。<sup>88</sup> 史料の示している応永二十六年（一四一九）の外宮正殿の形式は、古代から式年造替により伝えられた正殿の最末の形式を示している。一方の現状の外宮正殿は、永禄再興の形式を引き継いでいると考えられる。そしてこの断続の間に伝統形式が忘却されたであろうことは、福山博士も指摘しておられる。それでは外宮正殿においてどのような変化が起こったのであろうか。結論から言えば、外形は復興出来たものの構造はまったく新しく改まったと言えよう。以下、中世の形式と現在の形式とを対照しながら主要な相違点を述べる。

軸部 中世は掘立て柱の自立性に頼る構造で、水平方向の移動は縁長押と柱頂部の桁梁によって止められていたが、現在の形式では床下貫を用いて軸部を緊結している。また、板壁上部に力板あるいは頭貫を用いて水平方向の歪みに備えている。桁と梁の組み方は上下

が逆になり、桁・梁の断面も扁平から方形になった。

柱間装置 中世は正面中央両側の柱を内外から長押様の「かぶき」で挟み付け、方立は薄い小脇壁をそのまま方立とする簡素な構えとなっているが、現在は太い方立をたて「かぶき」は装飾として外側だけからあてている。

縁まわり 中世は縁束の上に「大床のけた」をのせて外周を繋ぎ、縁束と柱を縁繋で結んでいるが、現在は縁葛を縁束の頂部に通し、床下貫と縁束または縁葛間を縁繋で結ぶ。妻側では縁繋の受けを柱間に渡している。中世では縁束の位置が柱筋のみであるが、現在は柱筋の間にも縁束を立てている。また、縁繋も中世は柱筋だけの十六本であったが、現在は三十二ヵ所で繋いでいる。すのこに厚い板を用いているところは共通している。

小屋及び妻飾り 中世は各梁の上に四組の豕扱首を立てたが、現在は両妻のみに豕扱首をつくり、内部は梁上に棟束を立てる。棟木の振れ止めは中世は向扱首とよばれるトラスで固めたが、現在は小屋貫で固定している。

軒 破風の勾配は五十度からほぼ矩勾配に変化した。垂木の総数七十枝から七十二枝に増え、手挟み打ちから柱芯に合わせて打つようになった。

床 床の構造は板敷の方向が同じだけで、そのほかはまったく異なっている。中世は束柱を立てて柱と独立に床を支える造作的な構造であったが、現在は床下貫と大引き根太で支える一般的な仕様にな

っている。

以上、構造についての技術的な伝統は殆ど途切れていたと考えることが出来る。

#### 四、現在の両正殿における構造の相違

現在の内宮正殿と外宮正殿は、外見はよく似ているが、構造はかなり異なっている。主要な部分は次のようである。

床下貫の上下が正反対となっている。これは板敷の方向との関係であらうが、貫の断面寸法が全く違うこと、また貫の噛み合う大きさが全く異なっていることは、同じ貫ではあっても技術上は別の系統であることを示している。また、梁と桁の組み方を両殿で上下を逆にしている理由もわからない。梁と桁が噛み合う大きさも異なっている。棟木の丈が異なっているのも垂木や破風の計画が両者で異なっていることを想像させる。縁の構造にいたっては全く異なる。枝外垂木を内宮では極端に狭めているが、外宮では等しく割り付けている。

中世に廃絶した外宮正殿の形式を復興するに際して技術的な伝承が全く途絶えていたことは前に述べたが、内宮の正殿の場合も同様であったらう。内宮は寛正三年（一四六二）の正殿が明応九年（一五〇〇）に倒壊した後は、天正十三年（一五八五）まで正殿は廃絶していた。<sup>(9)</sup> 外宮正殿の再興が永禄六年（一五六三）であるので、内宮が二十年遅れて再興されたことになる。恐らくこの年代差が構造や技法の違いとなったのであらうし、またこの年代差が復原に対する考え方の

違いとして現われたのかもしれない。そして一度建った建物は相互の違いを調整することなくそのまま伝承されたのであろう。また縁の構造にみられる、同時代の技術と比較しても特殊な納まりは、伊勢の技術者たちが他と孤立した技術集団であったことを暗示している。

## 五、中世諸社殿の技術について—まとめにかえて

中世の諸社殿の技法の中には、古式を共通に伝えていると考えられるものがいくつかあった。板倉形式はその代表であるが、他に梁や桁の材を扁平に用いる使い方、束柱による床の支持などがあった。しかしその一方で、破風の勾配や垂木の配り方、扱首束の形式などの微細な部分に明確な相違が現われている。これらを建設された時代の技法の差がそのまま伝えられていると考えるならばそれもひとつの伝承における特徴であるが、すると逆に総ての建物が同じ時に始まったのではない、あるいは同じ時期に成立したのであれば造替の時々に便宜的な改良が積み重ねられたことを示しているとも言えよう。ここで考えるべき問題として復原への意欲がある。あるいは古式への探求の意欲と言ってもよい。中世の廃絶に際して古式への探求が外観においては成功したことは既に見たところである。戦後の造替に際しても古式への復旧から過剰な金具を取り除くことが行われた。伊勢神宮においては形式の墨守もさることながら、常に古式への復帰の意欲が働いていたと想像するのである。この問題に関わる部材として虹梁がある。現在の正殿は内外宮とも内部に虹梁風の梁が渡されている。また福山博

士は外宮正殿について長暦四年(一〇四〇)に内部に虹梁が渡されていたことを示す史料を紹介されている<sup>四)</sup>。しかし小論で触れた中世の史料には虹梁の渡されていたことをうかがわせる痕跡がないのである。梁の断面は扁平で、扱首束の長さも梁上端を基準としており、むくりを想像させる記載は全くない。これはどうしたことであろうか。失われた古式をまた復活させるという、意志的な復原が行われた可能性を示している。すると古式を伝えていると考えられる中世の形式が総て古くから伝わったものであろうかという問題が生じよう。

板倉の形式は古い形式を伝えているのであろうか。残念ながら古代の板倉の遺構が現在に伝わっていないので構造を比較することが出来ないが、板倉とペアになっている束柱の構造を校倉の場合の束柱の構造と比較するならば、校倉の場合は束柱上部を必ず細い部材で繋いでその上に幅の広い伊勢で言う地板を載せるのである。束柱に直接地板を載せる形式は古代では確認されていない。また柱を建てる外宮正殿の床下の束柱も、その「しきけた」の渡し方は現在のところ古代に類例がない。これらのことは古風な技法であつてもただちに古い技術であると速断は出来ないことを示していよう。混迷が深まるばかりであるが、ここで従来注目されていなかったことを二点ほどあげるならば、その一つは勾配が大変に急な社殿が認められることであり、その角度は扱首束が不要に見えるほどである。また一つは扉の開きが明らかとなる社殿は総て内開きとすることである。現在の社殿は写真で見るとかぎりすべて外開きであるが、古くは総ての社殿が内開きであつた

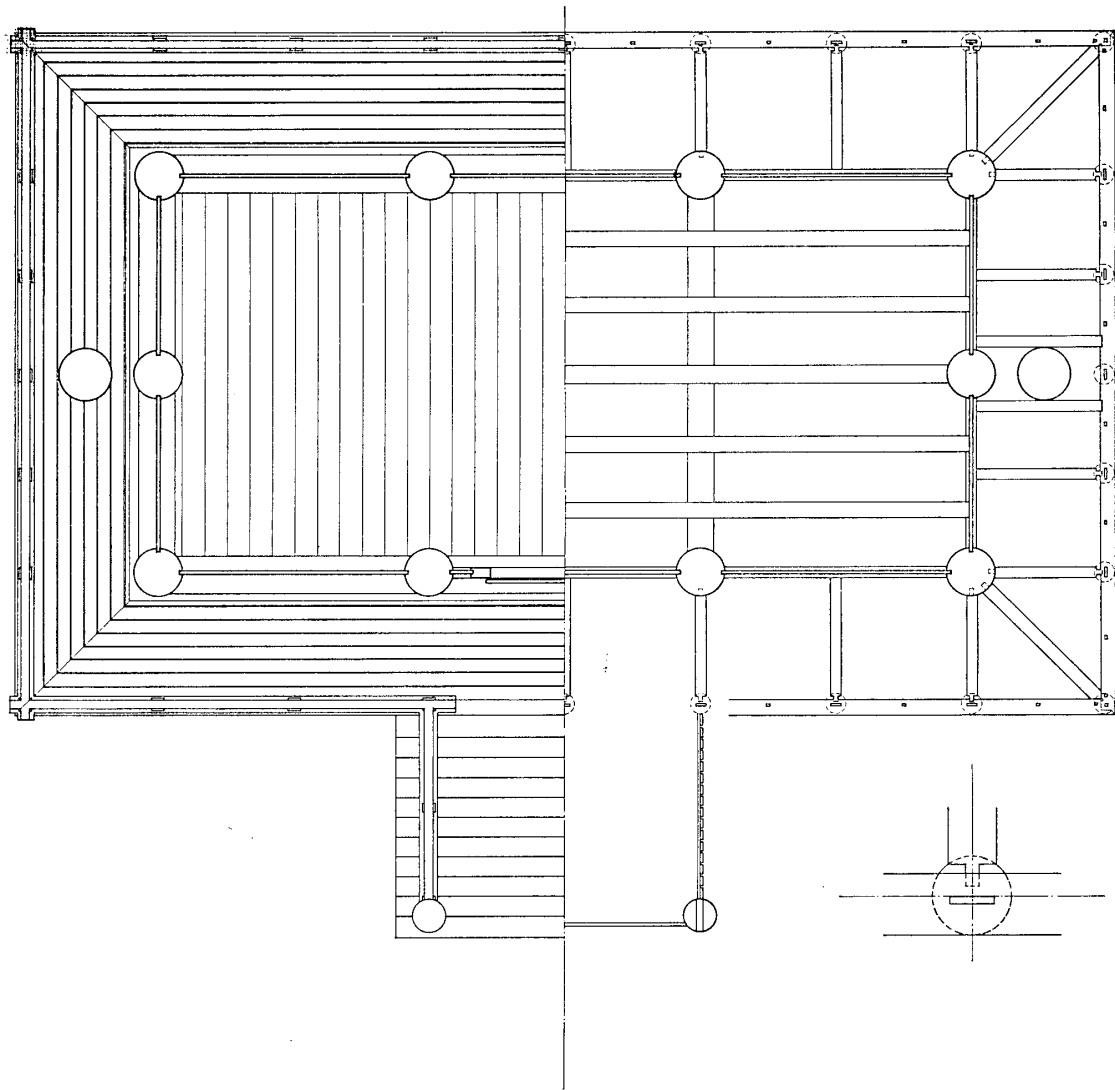


図1 (イ) 内宮正殿平面および床伏図  
 (『伊勢—日本建築の原形—』掲載図を一部修正)



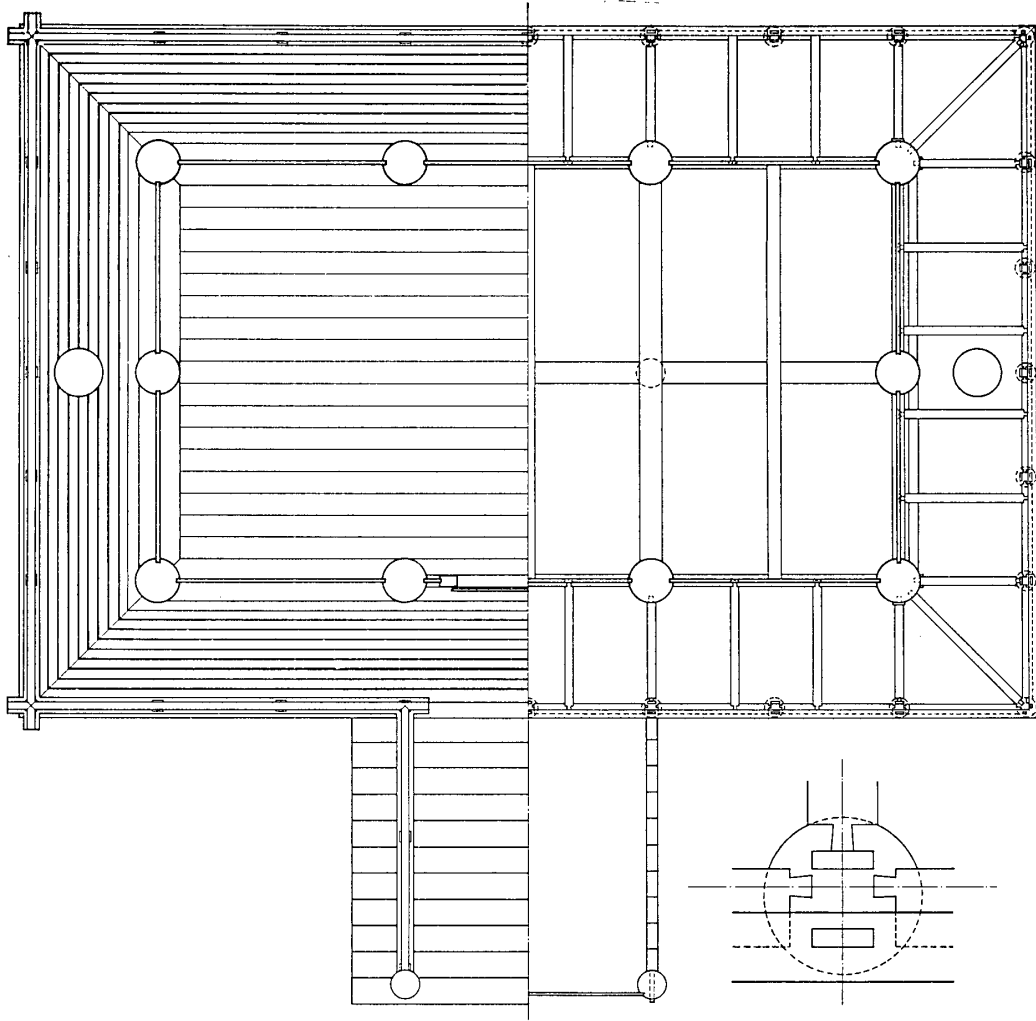


図1 (ロ) 外宮正殿平面および床伏図 (『伊勢—日本建築の原形—』掲載図を一部修正)

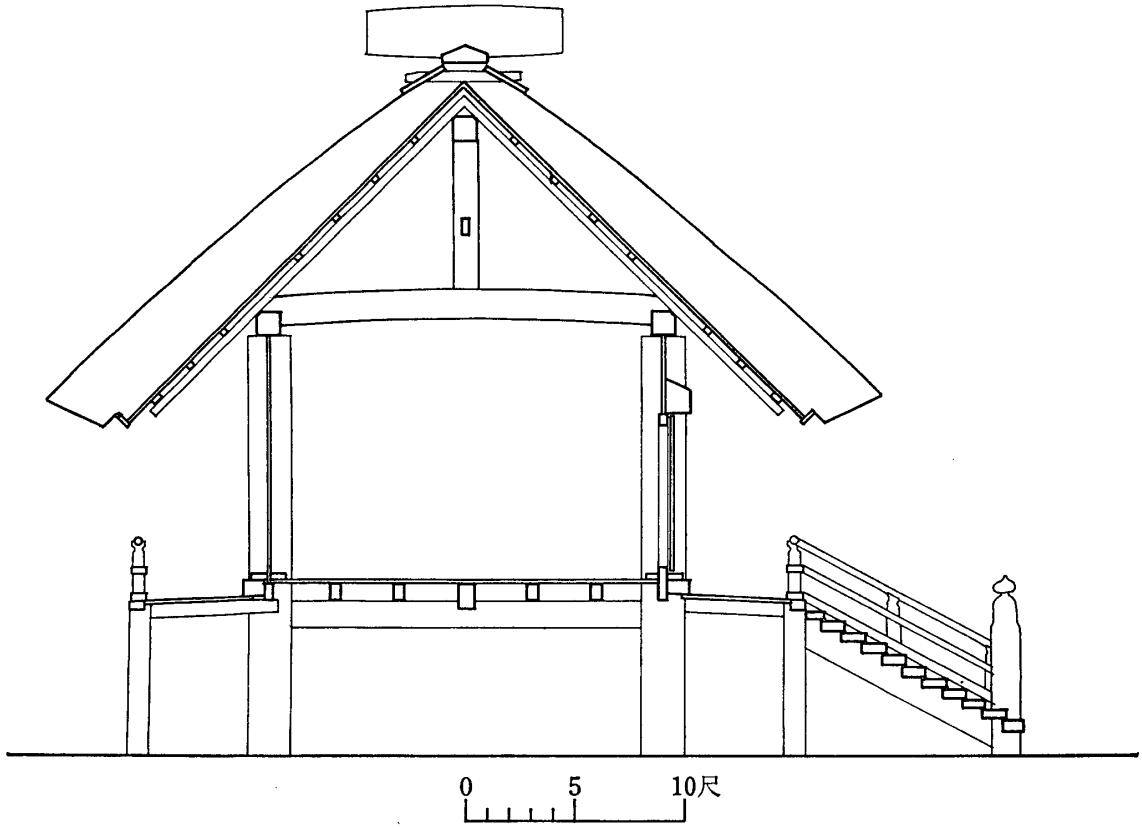


图2 内宮正殿现状想像図

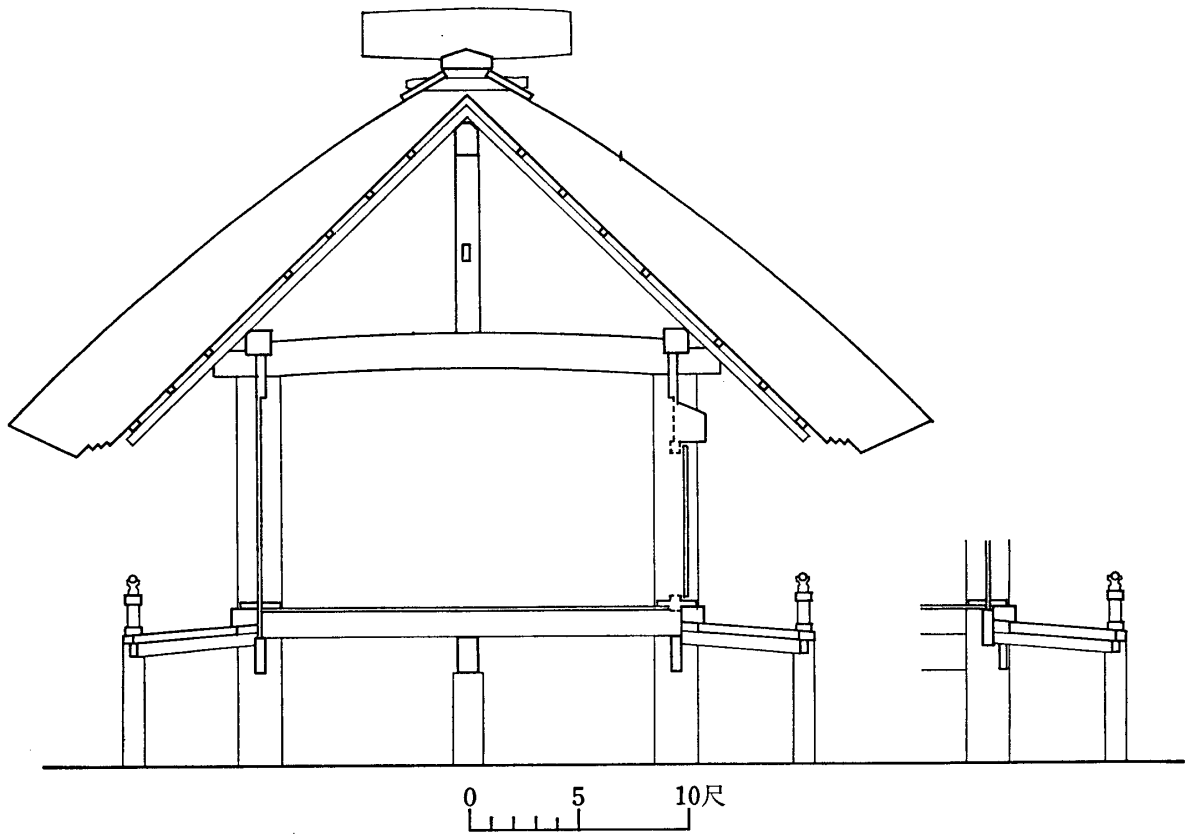
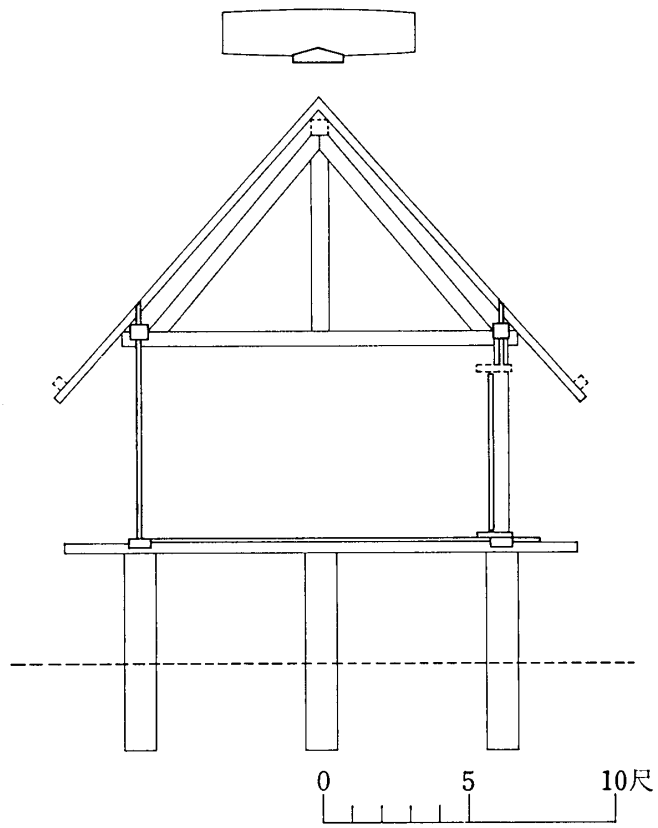


图3 外宮正殿现状想像図



- 記入していない部材
- ・さうの板
  - ・ちぎ
  - ・ふちかけ
  - ・むなもち
  - ・むかうさす
  - ・さす覆

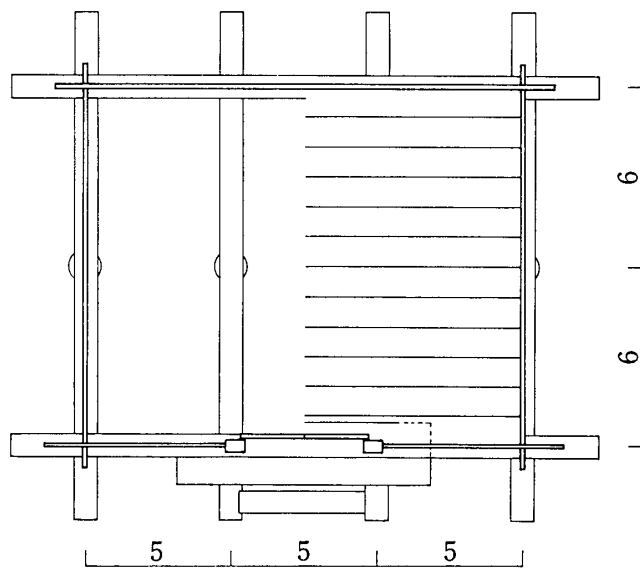
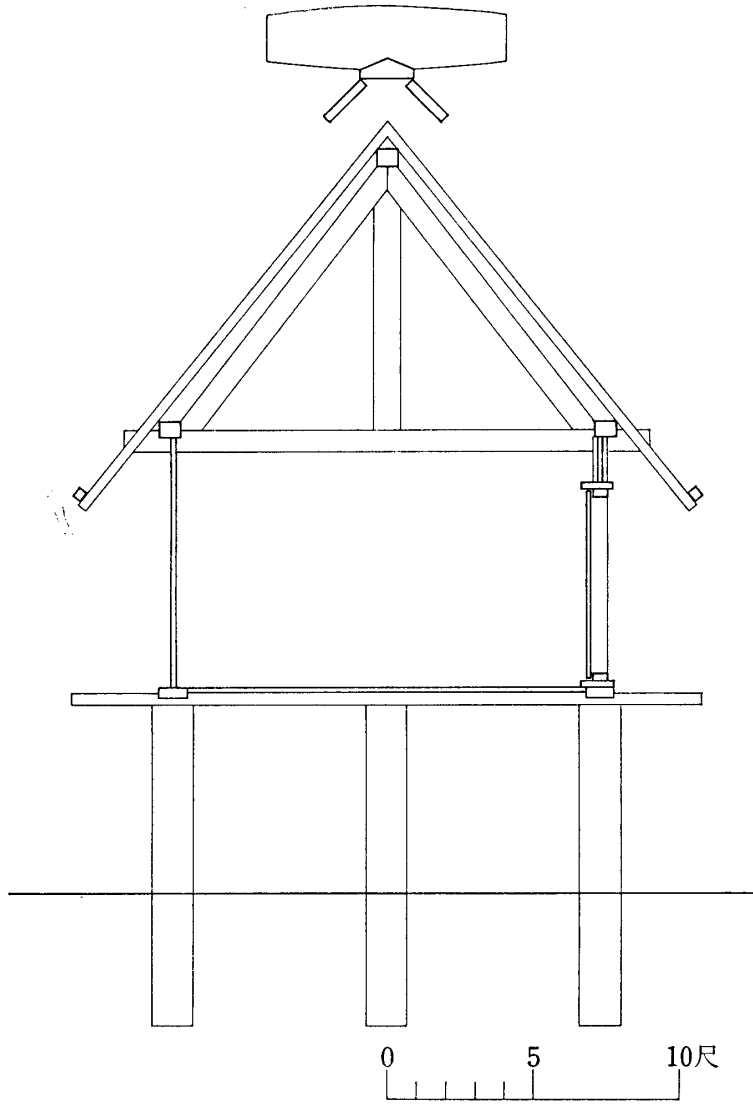


図4 内宮外幣殿（嘉録2年）



- 記入していない部材
- ・地ぎ(千木)
  - ・御棟持
  - ・扱首覆

- ・向扱首
- ・鞭懸
- ・貫の木

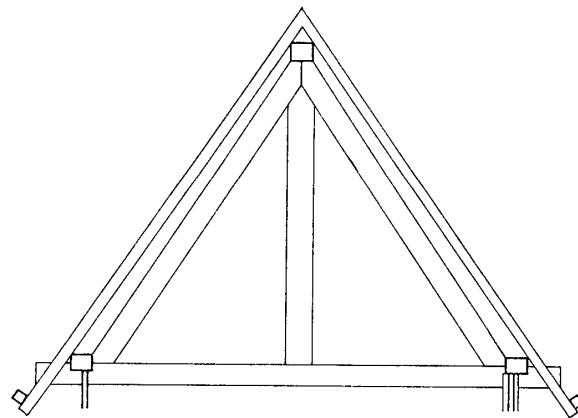


図5 外宮東宝殿 (康永3年)

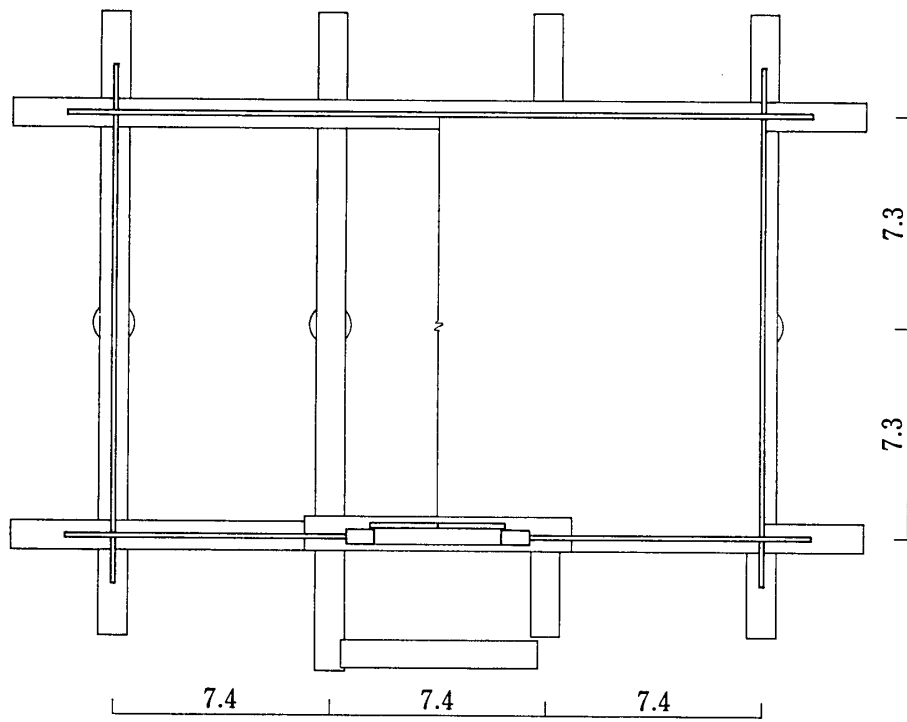


图5 外宮東宝殿（康永3年）

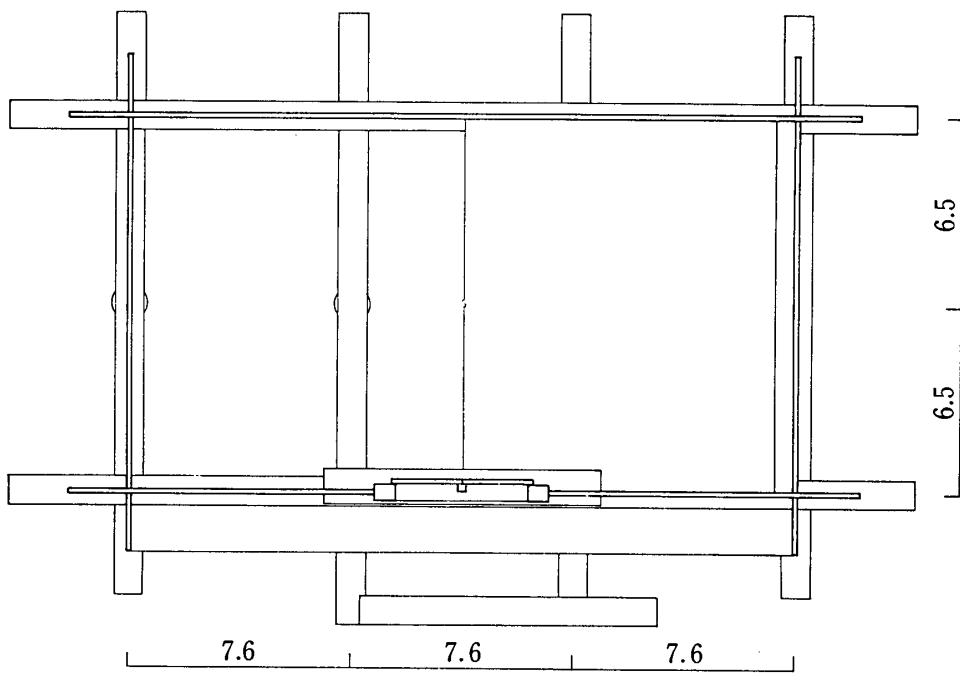


图6 内宮荒祭宮（応永33年）

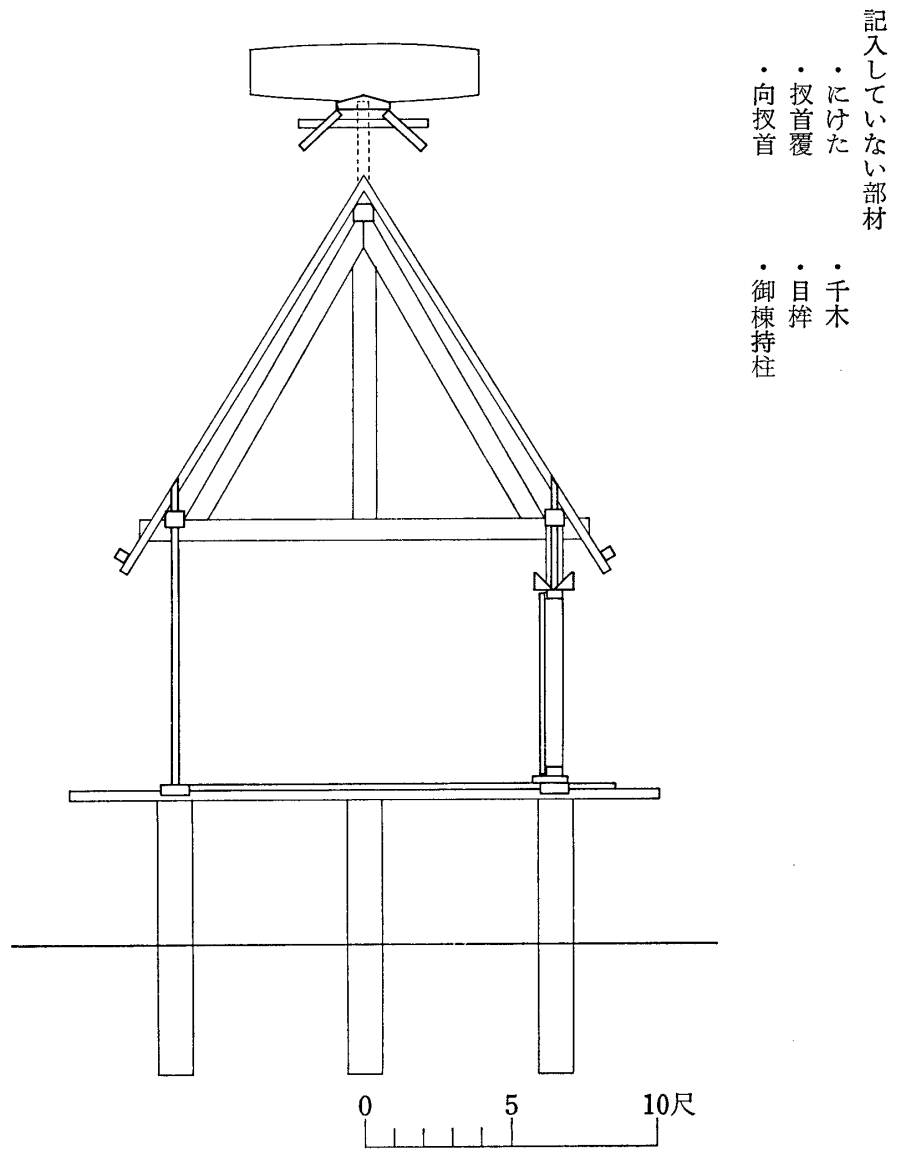
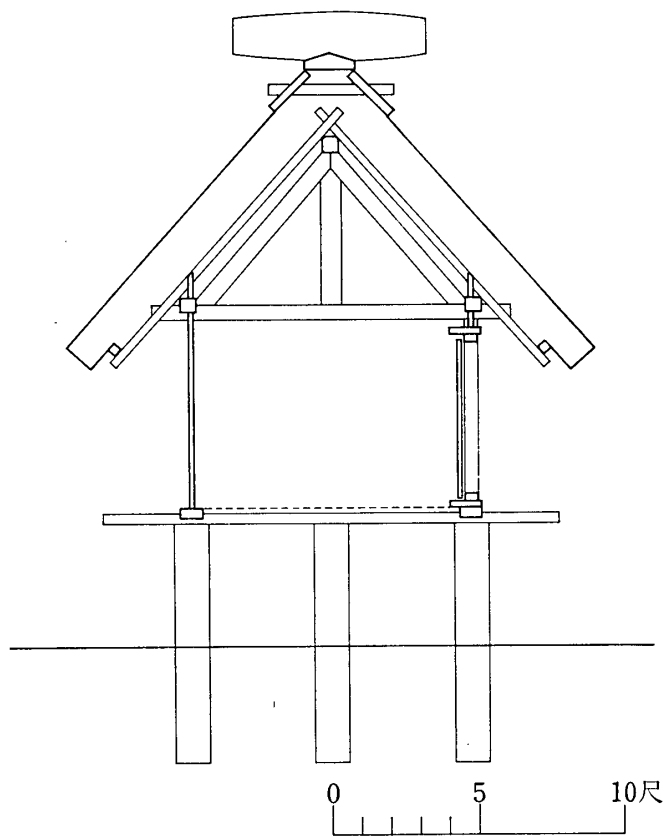


図6 内宮荒祭宮（応永33年）



- 記入していない部材
- ・向扱首
  - ・千木
  - ・鞭懸
- 御棟持の柱
- ・扱首覆
  - ・にけた
- 棟挟
- ・目杵

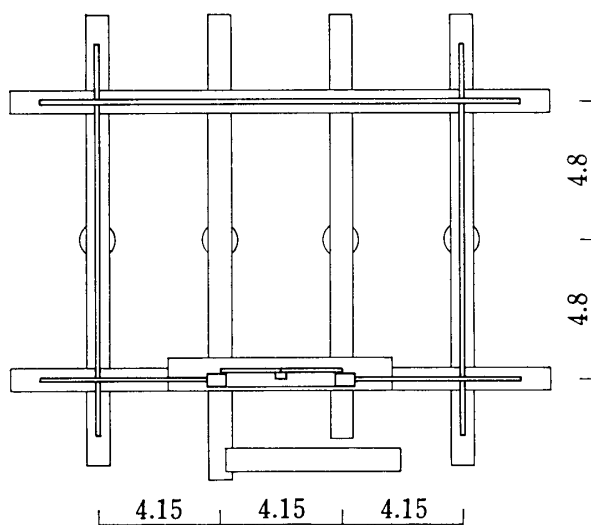
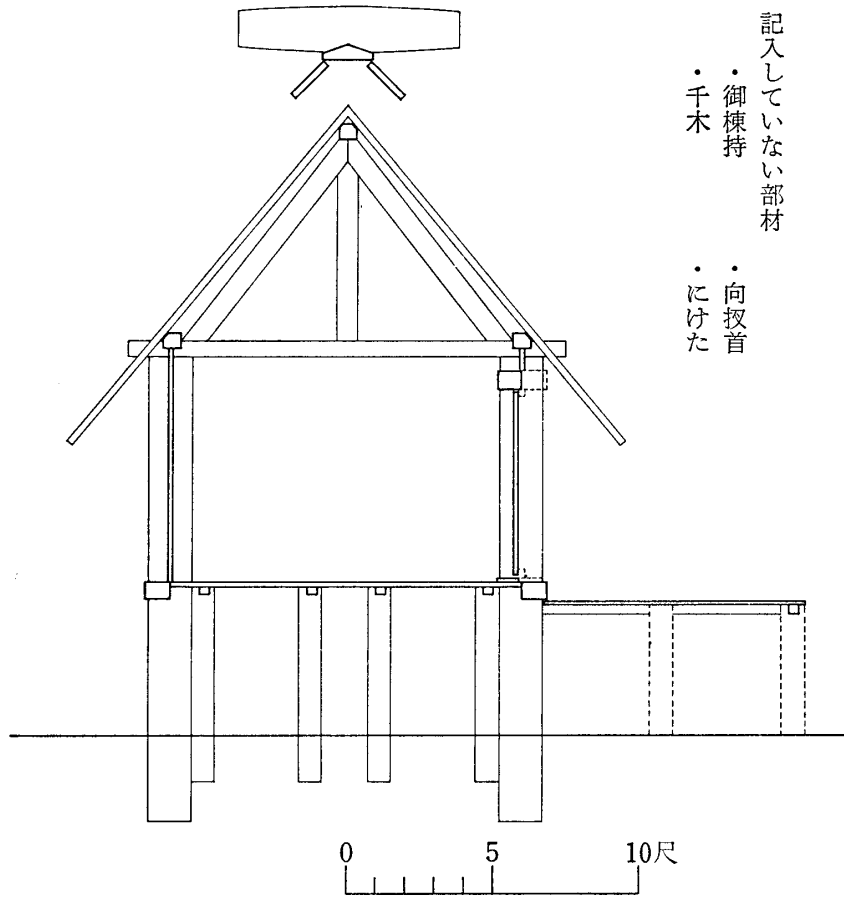


図7 内宮風日祈宮（文明11年）



- 記入していない部材
- ・御棟持
  - ・千木
- 向扱首  
にけた

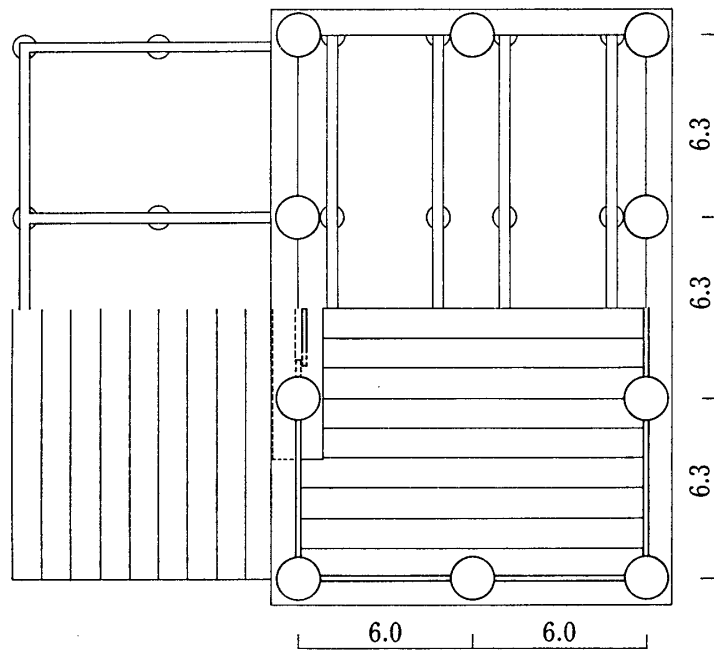


図8 内宮瀧原竝宮（室町時代初期）



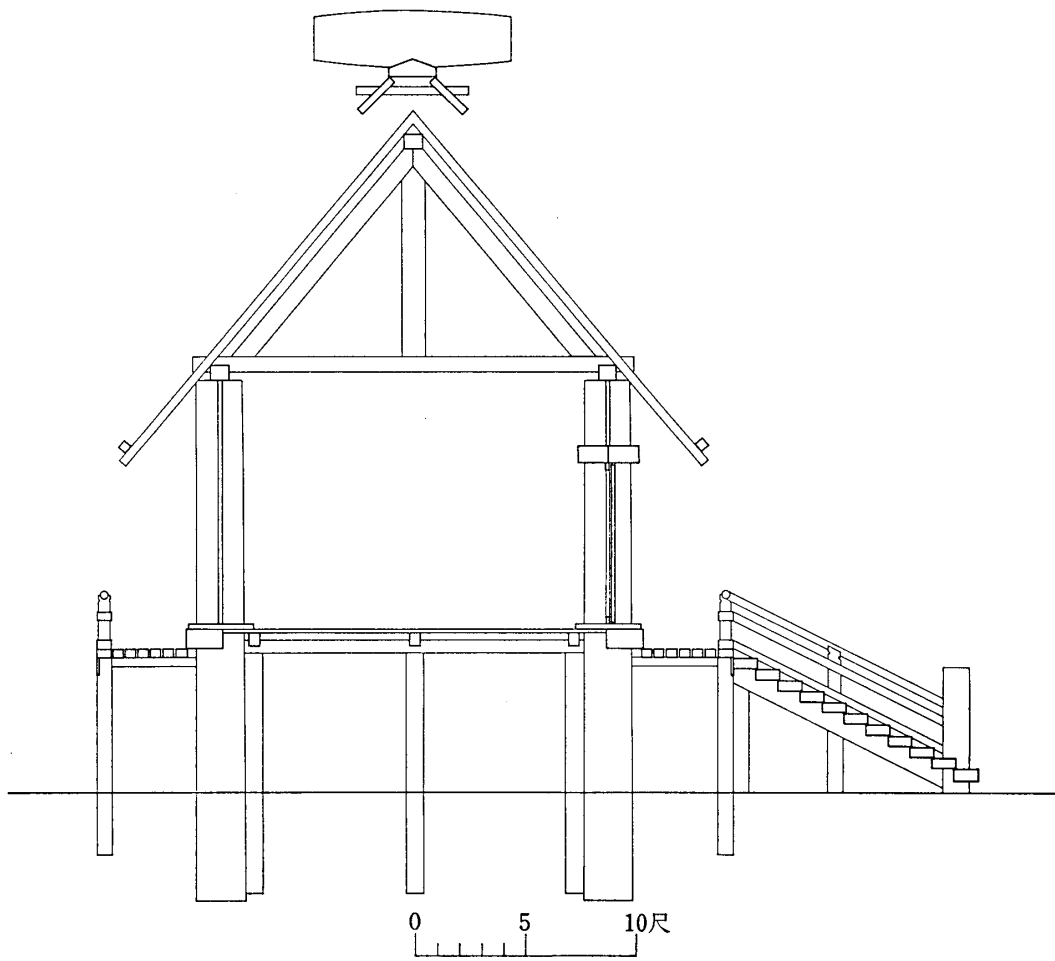


图9 外宮正殿（応永26年以前）

可能性が考えられよう。

なお小論は忽卒の間にまとめたので原典を確認するいとまがなかった。いずれ機会をみて書き改めたい。

注(1) 福山敏男『神宮建築に関する史的調査』一九四〇。一九七六年に『伊勢神宮の建築と歴史』と書名を改めて復刻された。

福山敏男「外宮正殿庭作日記とその解題」(『瑞垣』一一三号)、一九七七、『福山敏男著作集』四所収。

(2) 渡辺保忠『伊勢と出雲』一九六四。

(3) 拙稿「伊勢神宮再考―主に外宮正殿と延暦儀式帳について」(『普請研究』二三号)、一九八八。

(4) 『神宮建築に関する史的調査』二〇八―二一〇頁、「外宮殿舎寸法頭工引付」。付図四五。

(5) 同、九八―一〇〇頁、「外宮殿舎寸法頭工引付」。付図三六。

(6) 同、三七五―三七八頁、「内宮八箇請屋日記」。付図五九。

(7) 同、三七九―三八三頁、「外宮殿舎寸法頭工引付」。付図六〇。

(8) 同、三八五―三八六頁、「内宮八箇請屋日記」。付図六一。

(9) 「外宮正殿庭作日記とその解題」。復原図は『日本のやしろ―伊勢』(一九六三)に掲載された後、後掲の『神宮―第六十回神宮式年遷宮―』及び『福山敏男著作集』四に収められた。

(10) 丹下健三、川添登、渡辺義雄『伊勢―日本建築の原形―』一九六二。

渡辺義雄『伊勢神宮』一九七三。

撮影許可にいたるまでの苦心は『伊勢神宮』の「撮影雑記」に詳しい。

(11) 『伊勢神宮』「撮影雑記」。同書所収の堀口捨己「伊勢神宮」にその写真が掲載されているが(本文十五頁)、ようやく屋根の形式がわかる程度の遠景写真である。

(12) 小学館『神宮―第六十回神宮式年遷宮―』一九七五。

(13) 『伊勢神宮』(本文二七―八頁)と『神宮―第六十回神宮式年遷宮―』(一七四―八〇、二二〇頁)に、建設中の社殿の内部写真が一部公表されている。但し、『神宮―第六十回神宮式年遷宮―』一七九頁左上の「軸組の完成した皇大神宮正殿」の写真は梁と桁の上下が逆なので明らかに皇大神宮正殿ではない。小論では豊受大神

宮正殿の誤りと考えた。

(14) 小論で考察する史料では、部材の見付寸法を「厚」、見込寸法を「広」で表現しているようである。また後述の内宮風日祈宮では「梁の成下端六寸、たけ五寸」としているの、横に扁平な断面として用いているとしてよいであろう。

(15) 小論で考察する史料の中で破風や垂木の桁と棟木への取り付けきについてはっきり記したものはない。この問題に関係するのは垂木と萱負の高さの合計と破風の幅であるが、この三者が記されている社殿ではそれが一致する。

内宮外幣殿	垂木三・〇	萱負――	破風六・八	(単位寸)
外宮東宝殿	垂木三・五	萱負四・〇	破風――	
内宮荒祭宮	垂木三・〇	萱負四・〇	破風七・〇	
内宮風日祈宮	垂木二・八	萱負三・四	破風六・二	
内宮瀧原竝宮	垂木二・八	萱負――	破風七・五	
外宮正殿	垂木四・〇	萱負四・五	破風八・六	

垂木と萱負を破風の幅の中に収めれば桁と棟木への破風と垂木の取り付けきは同じになる。また萱負を破風の先端に一部掛けるようにすれば、破風を棟木と桁の芯に掛け垂木は破風下端より上部に納めることができるが、その寸法を記す史料はない。また面戸板の高さを優先すれば垂木が殆ど桁に掛からない。小論では個々の社殿で垂木の取り付けきを確定できなかったため、扉のしまりを検討する際の上限の側というところで作図したものが多し。

(16) 枝外垂木の割り付けの方法が一つの社殿で完全にわかるものはない。内宮東宝殿で、桁の先端から破風を二寸二分よけること、同殿と内宮風日祈宮で、垂木の配り方は小間で測られていること、また内宮東宝殿で、千木(破風)の組み手によって片側の傍軒が短くなる分は均等に割り付けていることが知られるのみである。小論の本文に記した枝外垂木の一枚寸法は、以上の方式を総合して概算をしたものである。

(17) 注三。先稿では縁まわりの部文断面図を示したが、今回梁行断面図を起こすにあたり、すのこが縁長押の下に納まるような一般的な構造に変更した。

(18) 『神宮建築に関する史的調査』、三八九―九〇頁。福山敏男「神宮の建築とその歴史」(『神宮―第六十回神宮式年遷宮―』所収)、『福山敏男著作集』四に収録、一二九―三一頁。

(19) 同、九一―九九頁。

(20) 『神宮建築に関する史的調査』、五九頁。